

佳作

四季を果樹へ過ぐらうとらんじゅ

山梨県 山梨県立北杜高等学校三年 差ヶ久保 瑞希

中学生の私にはきつと、陽光降り注ぐ果樹園で、脚立に上ってハサミを握る自身の姿を想像するなど、到底できなかつただろう。過去の選択がなければ、棚から垂れ下がる若芽色の房も、袋を外した後のじんわり色づいてゆく果実も知らないまま人生を終えていたかもしれない。私が通うのは公立高校の総合学科。その中でも農業をメインに学習している。農業という一つの学問は野菜や果樹、草花など様々な分野に分かれており、私は果樹専攻だ。山梨の特産品であるモモやブドウを中心に、多種多様な果樹を栽培している。

私が所属する学科では農業のほかには福祉、情報、土木など幅広い学びの選択肢がある。そんな中で私が果樹を学ぼうと決意した裏には、今ここでしか学ぶことのできないという唯一性が存在したのではないかと思う。家の庭ではジャガイモやニンジン、ナスにトマトなどの野菜が元気にその葉を伸ばしている。祖母の趣味のために作られた花壇にはチューリップや千日紅、矢車草など四季折々、色とりどりの花が咲く。だが果樹は唯一私の身近

家の方に「お疲れ様です」とお礼をするようになった。学校の農場よりもずっと広い果樹園で、人間の都合ではどうにもできない自然というものを少ない人手で管理する苦労を知ったからだ。朝のニュース番組で農業に関連する話題がよく耳に入ってくるようになった。人手不足や高齢化から農作業の自動化、人工知能の導入、農薬に対するの根も葉もない批判まで。ニュースを自分事として捉えられるようになった。

そんな変化の中で、何よりも心に残ったのは、春から苦心して育てたモモが大きく成長して、自分の掌の上に乗った瞬間だ。長靴で農場を歩き回ったあの疲労感も、夏の暑さでシャツが肌に張り付いた時の気持ち悪さも、作業中に顔の周りを飛んでいた名前も知らない虫たちの煩わしさも、何もかも忘れてしまうほどに嬉しかった。丹精込めて育てたものが形になる喜びを味わった。昨年はカメムシなどによる虫害が酷く、傷や病気などで販売できなかつたものも多かった。

三年生になった今年は遂に山梨県の果樹栽培の代名詞であるシャインマスカットを栽培する。七月を迎えた今はまだもう房づくり、摘粒と呼ばれる果粒の間引き、無種子化のための薬剤処理、袋掛けなどの工程を済ませ、果実が成長するのを待つのみだ。だが、私の学校の果樹園では他にもブルーベリーやリンゴ、ウメにカキなどを扱うため休んでいる暇はない。しかし、その忙しさが心地よく感じるのには、一年前の夏の喜びを知ってしまったから

にないものだった。それもそのはず、果樹は野菜や草花とは異なり、栽培のために広い面積と長い時間を要するのだ。どう考えてもまず家庭菜園には向かない。そんな遠い世界への入り口が今私の目の前にある、そう思っただらいてもたってもいられなくなり、選択する科目の記入用紙に「果樹」と書いたのが高校一年生の秋。二年生から始まる学習が私の人生観に大きく影響を与えると全くと考えていなかった。

フルーツ王国。それが私の住む山梨県のキャッチコピーだ。春には桃や梅が一斉に花を広げ、まさに桃源郷と呼ぶべき景色を目にすることができる。当時の私はまだ進路を決めきれず悩んでいる状態だった。しかし短い高校生活をどうすれば有意義なものにできるかについては人一倍考えているつもりだった。そこで果樹である。どうせならこの山梨でしかできないことに挑戦してみたかった。

慣れない作業着に袖を通し、まだ少し底冷えのする農場を長靴で歩いた日のことを今でも鮮明に覚えている。果樹栽培という仕事は一年間休みなく行われる。夏から秋にかけての果実の管理だけでなく、春には新梢の手入れ、冬には剪定が待っている。実習は二年生から始まった。季節が一巡して今これを書くまでに私は様々なものを見て、感じて、学んできた。

実習を始めてから、普段見ている世界が一変したように感じる。道路沿いの果樹園を見かけると、心の中で農

ではないか。

また同じように春を迎えて、この場所を巣立つその日まで、私はこの果樹園と向き合い続ける。目の前の樹を大切に育て、いつか後輩に同じ喜びを知ってもらいたい。